
永久の覇者 カイン

亜紀内 司

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

永久の覇者 カイン

【Nコード】

N9626Y

【作者名】

亜紀内 司

【あらすじ】

『私の全てを賭けにして

この世界を守ると誓おう』

遙か昔、人魚がまだ生きていた頃
を絶った。

魔王、という存在は自ら命

正確に言えば2000年後の未来に転生した。自らの魔力と記憶を封じて。これはその魔王が転生した後、カインという超 傍若無人な青年になり、成長していく（していくか…？）お話です*

コメディを多めにしたいですが、シリアスもちろんありますb

《読んでくださっている方へお知らせ@結構重要かもです*》

<http://syosetu.com/userblogmanage/view/blogkey/318388/>

《ここからは随時更新中の作者の独り言欄です 無理に見ないことをおススメします》

個人的にはヴァンパイアの幼女キャラを+@したいと思っています

()

「え、幼女ってもう居るじゃん、魔女で」とか思わないで下さいね
?!

あ、いや、別にロリコンではありませんからっ

あとあれですね。

なんかすごい強い魔法使いが出てきて主人公とた…(以下省略)

魔王&勇者&賢者の組み合わせを凄く愛していたりするのでさつさと(えw)登場させたいのは山々なんです、なんか話しが進まない上に更新が遅い()

望みは全て（前書き）

魔王……魔王って響き素敵だと思いませんk（殴

望みは全て

それはいつから始まったんだろう？

望んでいなかったそれは、彼の知らない間に起こった。

信頼していた者に裏切られる時の胸の痛み、人を殺す時のあの罪悪感。

全て全て全て……！！！！！！

あれの所為だと言っのに　　！！！！

ああ……早くこの世界から消えてしまいたい。

そうすれば、そうすればきっと

この胸の中にあるものの正体が分かる気がする。

今まで自らを転生させる度、前世の記憶を持たせようかどうか迷い、結局残しておいた。

しかし……

もしもその記憶全てを私自身の中に封印すれば、もしかしたら未来は変わるのでは……？

ああ、親愛なる最愛の友よ……君に託そう。

私の命を。

私の全てを賭けにして

「この世界を守ると誓おう。」

望みは全て（後書き）

中途半端な終わり方で申し訳ない；；

評価や感想など求む！です*と言ってもまだ全く進んでいませんが
…

青年と黒猫（前書き）

いきなり傭兵たちが逃げている場面から始まります。

青年と黒猫

「ただの傭兵である貴様等を助ける義理などないだろう？」

我先に、と逃げていく兵の中、救護室で怪我の治療をしていた傭兵 サルジアが助けを求めた時、彼の指揮官は冷たくそう言い放った。

その光景を横目で見ながら、速やかにその場から退却していく同士たち。

サルジアは彼等に視線を向けるも、誰一人として助けようとしな
い。

「……………」

彼が絶望した時だった。

「おいおい、我等が指揮官様は冷てえなあ…………？」

そう言いながら、逃げていく傭兵を押しつけ、彼の前に現われたのは…

「カイン……………」

サルジアは目の前に現われた自らの友人を呆けた顔で見つめた。

「あの指揮官様はどっかの没落した貴族出のご立派な奴らしいから、

そんな事が言えるだけさ」

わざとらしく大きな声でそう言って、パチリ、とウィンクする。

た。……このタイミングでは絶対言えないが、上手いとは思えなかった。

「というかお前、いつの間に左腕怪我してたんだよ」

そう言いながら包帯でかなりきつく巻かれた上に血が滲み出ている彼の腕を、ことも何気に叩くカイン。

「っ ……!!ってえよっ!!!!!!!!」

苦笑いして軽口を叩く彼だが、尋常でない痛みらしく、大量の汗が噴き出していた。

「あーこりゃあかなりの重症だな」

はははは、と笑うカインを恨めしそうにサルジアは睨んだ。

「お前なあ……」

「それより、サルジア」

急に真顔になる。

「助かりたい、よな?」

何故そんな分かりきった質問をするのか、彼は聞かなかった。カインは意味の無いことはしない。

それを知っていたからだ。

「もちろん」

即答した。

それを聞くと彼の表情がいたずらっ子の少年のようなものになる。

彼は辺りを見渡し自分達しかいないことを確認すると急に救護室の棚に視線を向けた。

「……もういいぞ、出て来い、ノアール」

は？誰だそれ

サルジアが言うつよりも先に手入れの行き届いた美しい毛並みを持つ黒猫が彼等の前に飛び出した。

『やっと私の出番ですね、カイン様』

猫は流暢な人の言葉でそう言うつと、ふとサルジアに視線を向ける。

『……その方は？』

「俺の友人だ。……絶対に裏切らない、な」

一瞬彼の瞳に影が差した気がしたが、すぐまたいつもの生意気な光を宿す。

『……分かりました。カイン様が言うなら信じましょう』

黒猫はそういつと何か呟いた。

その途端、彼等を囲つように青白い光を放った魔方陣が現われた。

「?!」

「サルジアは呆然とする。

魔術方面で雇われた傭兵である彼には分かる。

これはかなり難度が高い、高等魔術の魔方陣だという事を。

「こんな猫が?!」

「ほら、サルジア。肩貸すぞ」

ニツ、と笑いながら魔方陣の中央に立つカイン。
今はその笑顔が、とても心強く思える。

『空間を捻じ曲げて移動いたしますので、たまに酔う方もいらっしゃいます。お気をつけ下さい』
誰にともなくそう言った黒猫は視線を自分よりも遙か上にあるカインの顔に向ける。

「了解、了解。魔術とかよく分かんねえけど、よろしく頼むわ」

「彼がそう言った途端、その場の景色が、崩れた。

く く く く く く く く く く く く

この世界の東に位置するアノテマリア大陸。

その大陸の最南端にある小国ミラリスと、その隣の小国グレイシーは昔から相容れなかった。

隣国なので形だけは同盟を組んでいるが、お互い目を光らせ、いつボロを出すかずっと様子を伺っている。そしてそれを理由に戦争を起こし、さつさと自らの国に従わせようという魂胆だ。

そして先月、ついにグレイシーの『裏切り』と取れる行動をミラリスが目敏く嗅ぎつけた。

それはグレイシーが、大国スノーランとひそかに同盟を組もうとしている、という物だった。

元々、相容れない両国が同盟を組んだ最大の理由がスノーランの政策に抵抗する為だ。

しかしグレイシーの王はこれ以上スノーランに抵抗すれば、自らの国が危ないと悟り、スノーランに同盟の話を持ちかけた。

それを嗅ぎつけたミラリスの王は出兵をし、グレイシーとの戦争が始まった。

しかし、ミラリスの王はある誤算をしていた。

それは、彼が戦争を始めたとき、もう既にグレイシーはスノーロー

ランと同盟を組んでいた、ということだ。

つまり、兵や経済面など全てにおいて、ミラリスは劣っていた。

しかもスノーランの魔術部隊の中には有能な幻術師がいたらしく、ミラリスの兵は混乱に陥った。

理由は簡単。

バイコーン フェニックス ユニコーン
二角獣や不死鳥、一角獣……しまいにはワイバーンなど、幻の生物と謳われるものを戦場に持ち込むスノーランに恐怖を覚えられないものはいないだろう。

幻術とは露知らず。

恐怖という名の思いが彼等ミラリスの兵の中に生まれた途端、ミラリスの兵の戦意は喪失した。

そして同時に、我先に、と敵に背を向け戦場からの逃走を図ったのだ。

）　　）　　）　　）　　）　　）　　）　　）　　）　　）
）　　）　　）　　）　　）　　）　　）　　）　　）　　）

「……にしてもこれからどうすっか」

先程まで戦場で血を浴びていた者とは思えない緊張感のないカインの発言にサルジアは軽いため息をついた。

「いや……どうすっかって……。とりあえず、陛下に会いに行こう」

「……そうだな。どうせ目の前に城はあるし」

二人は同時に同じ方向に視線をめぐらせる。

黒猫、ノアールのおかげで戦場を切り抜けて来た彼等が空間移動で着いた先は、ミラリスの城の真ん前だった。

『……カイン様はこの国の王がお嫌いでいらっしやるのですね』

ノアールはそう呟くと『カイン様が望むのであれば今すぐ消しますが……』と恐ろしいことを言い始めた。

「いやいやいやいや！ダメだろ！！……あ、いや……ダメ、です。うん。一応であつてもこの国の……国王……」

ミラリスが急に敬語になったのはノアールにギロリと睨まれたからだ。

なにこの猫、すげえ怖え……。殺気が……さっきからずっと背中に……。

そんな事をサルジアが思っていると急にカインが真面目な顔になり、呟き始めた。

「あいにく、戦争に殆どの兵が参戦してたから、この城の警備は今とても薄い。侵入して王を脅して、無理矢理報酬を要求すんなら今のうち……」

「いや、ちゃんとあつた事を全部話してから報酬貰おうぜ。平和的

に解決……」

「ああ……でもそうか……。あの糞爺くそぢいにはいつもなんかやたら強そうな姉ちゃんがいるんだっけ……」

「ちょ、仮にも一国の王を糞爺呼ばわりってな……」

「いや……でも相手は女……。ちょっと強引でも突破は出来ないこともない……」

「お前、如何わしい事考えてねえよな？」

『カイン様に限って、それはありません』

ノアールに間髪入れず突っ込まれた。
相変わらず友人は考えに没頭するあまりサルジアの言葉自体耳に入っていないかったようだが。

難しそうな顔をしながら、言っていることは無茶苦茶だった。

しばらくサルジアがノアールの殺気のコもった視線に耐えていると急にカインが声を張り上げた。

「……よし、決めたっ……!!……ってあれ？どうしたサルジア。なんか引き攣くわってるぞ」

思考の海に浸っていたカインが現実に戻ってきたらしい。

「いや……別に……」

実際は、ノアールに傷口を噛まれ、痛みに悶絶していたのだが、それを言ったら殺されるだろう……猫に。

「……そうか。まあいいや」

(よくねえっ！)

心中で突っ込みつつ、ノアールの目が光っている今は絶対に口を滑らせない事を自らの心に固く誓う。

「じゃあとりあえず、侵入しますかね、城に」

「は、本気で侵入する気だったのか?!」

確かに彼ならやりかねない事だが……。

「いや、だって門番がないんじゃ、取り次ぐとか無理だろ」

残念なことに正論だった。

『流石です、カイン様。一生ついていきます』

ノアールがとても嬉しそうに言った。

……結局この猫はなんなんだ……。

「はぁ……まあしょうがないな……。明日からの生活費とか困ってるし」

苦笑しながら、自らの妹と弟を思い出す。

「じゃっ、そーゆーことで」

カインは目をららんと輝かせながら、城への侵入を開始した。

青年と黒猫（後書き）

いきなりな始まり方ですみません……

侵入者と国王（前書き）

侵入者は大体誰の事か分かるかと…（前の話を読んでいれば）*

侵入者と国王

小国ミラリスの城、カナレ城。

唯一の城に入る為の門には跳ね橋があり、周りには水が張られた堀がある。

警備だけは嚴重な国王は、城の作りも出来るだけ侵入者が容易に突破できないようにしてあった。

………あつたのだが……。

「よお、糞^{くそ}じじ……じゃなかった、国王陛下」

「………」

ミラリスの国王、フレディ・ミラリス・サラリユーナは、城の中への侵入をいとも軽々とやってのけた目の前の青年に啞然とした。

「お前っ！国王陛下になんてことをっ……！陛下っ！失礼しましたっ！」

その隣で腕を怪我しているのにも関わらず毛並みが綺麗な黒猫を抱えている青年はそう言って、真っ青になっていた。

しかし、そんな会話は彼の耳に届かない。

「………君、名前は」

フレディはやっとのことで声を絞り出す。

警備だけは嚴重にやってきたはずなのに、こんな若者に軽々と侵入を許してしまうとは……。

そう思いながら。

すると青年は嬉しそうに「俺の名は、カインってんだ」と言った。

カイン……？　そう言えば城の騎士の間でそんな名が噂になっていた気が……。

どんな噂だったかと自らの記憶を探ってみるも、思い出せない。もともと記憶力には自信がなかった。無理もないか、と自分で勝手に諦める。

「で、隣にいんのは友人のサルジアに、黒猫のノアール」

カインと名乗った青年は順にその場にいた者の紹介をした。

「俺たちはアンタ……じゃなかった……国王様に報酬を貰いに来たんだ。傭兵として働いた分の」

さっきまでの好意的な笑みとは程遠い、黒い笑みを見せる。

傭兵として。

その言葉で、国王は目の前のカインと言う青年の噂……これまでに起こしてきた事を全て思い出した。

金がないから国王に下働きとしてでもいいから雇ってくれと言いたいと、この城の門番に言って断られた瞬間、門番を殴って一瞬で気絶させて大騒ぎになったとか、城下の見回りにあたっていた警備

員を力だめし、などと言つて、いきなり真剣で襲い掛かったとか、十数人の山賊に襲われた時、瞬殺し、彼等が持っていた金目の物全てを盗つていったとか……………。

拳句「何故そんな馬鹿なことをするんだ！」とフレディ自らが、使者を彼の元に向かわせ、聞きに行かせた所、

「いや、だって金がなきゃ生きてけねえし、傭兵として雇つてももらえねえし」

という、少々ふてくされた青年のどうでもいい私情を聞かされ、延々と金について語っていたと言う。

しかし、彼が金に執着する本当の理由は、実際のところ自分の為でなく、遊びに来る村の子供たちの為に用意する砂糖菓子を買う為らしい。

彼はそんな事をわざわざ使者に言わなかったようだが、丁度、そのとき村の子供たちが彼の家に遊びに来て、使者がなにも聞いていないのに勝手にべらべら喋ってくれたらしい。

そんな変わり者の青年を特別に傭兵として雇うことにしたのが自分自身だったと言うことにフレディは頭痛を感じる。

もしここで断つたら何かやらかすのは目に見えている。

「……………分かった、要求を呑もう。その代わり、一つ聞かせてほしい」

それは、代わりと言うにはあまりにも素朴な質問だったが、国王にとつては重要な事だった。

「何故、警備に見つからずここまで来れた？」

それを聞くとカインは、ニヤリと笑う。

「その有能な黒猫が、入れてくれたのさ」

彼がそういわずと黙っていたサルジアという青年が抱いていた黒猫が嬉しそうに『ニャー』と鳴いた。

「……………」

国王はあまりにも信じがたい彼の発言にしばらく呆然とせずにはいられなかった。

）　　）　　）　　）　　）　　）　　）　　）　　）　　）
）　　）　　）　　）　　）　　）　　）　　）　　）　　）

「で、糞じじ……………国王、そろそろ俺の報酬をくれないか。なにダッセエ面してんだよ」

しばらく国王がショックから立ち直るのを待っていたカインだが、完全に立ち直るのを待っている程、彼にも時間がない。いつ彼の護衛が来るか分からないのだ。

「……………ああ……………そうだったな……………。14万キルでいいか？」

まだ猫に警備を突破されてしまったショックから完璧には立ち直れないらしく声に生気がない。

現に玉座に座ってカインたちの方を向いてはいるものの、目の焦

点が合っていない。

「は？14つて……。国王様さあ、冗談も大概にしるよ？戦場で大活躍して生き残ってきた英雄に14つて……。俺の存在をなんだと思っっているんだ」

カインがやれやれ、と肩をすくめて見せる。

（始まった……。カインの“口八丁手八丁”……。世界一世渡り上手な男……）

カインの演技力に少々呆れつつも尊敬してしまう自分は、やはり彼の實力は認めているようだ。

「14万キルでは足りないと……。？では30万キルでどうだ？」

カインの『14万キルでは足りない』という発言に少々驚いた国王だったが、何か起こされてはたまらないので、金額を上げる。

「うーん……………」

カインがわざとらしく首を傾げながら唸る。

「……………では、そなたはいくらがいいんだ？希望は絶対に叶えてやる」フレディが投げやりにカインにそう問う。

何秒後に、彼は自分の発言に後悔する事になる。

国王の『希望は絶対に叶えてやる』という発言を聞いた途端、カインの瞳がキラリと光った……………気がした。

（……………俺、疲れてるのか……………？人間の目があんな分かりやすく

光る訳、ないだろう……)

ノアールを片手で抱えながら、もう片方の手で自らの目をこするサルジア。

「なあ、国王。一つ質問なんだけど」

カインがおどけた口調でそう切り出す。

「なんだ？」

「……報酬つてさ、物とかも貰えんのか……？」

「まあ、出来ないことはないな、そなたが望むなら。もう叶えてやると言ってしまったしな……」

それを聞くと、カインの目がらんと輝く。

「じゃあ俺に土地をくれ……!!」

「……は？」

国王とサルジアの気の抜けた声が重なった。

「いや、だから、土地……」

カインがそう言いかけた時、いきなり頭上から、黒い何かが降ってきた。

「ちっ……もう来たのかよっ……!!」

カインが舌打ちする。

「……侵入者は排除してくれる」

女性の声と思われるものがどこからともなくこの高い天井に響く。

「は……？は……？！」

サルジアは自らの足元に落ちた黒いものと今の状況を把握できず
呆然とその場に立ち尽くす。

「……くない………？」

『この鈍間ツノメっ！！走りなさいっ！！当たりたくないでしょうっ？！』

自らの腕の中で叫ぶ猫の流暢な言葉で我に返り、必死に走り出す。

殺される。。

本능がそう告げていた。

「サルジアー！こつちだっ！！！！！」

脱出経路を窓に決めたカインが手招きしている。

「……………」

無言で頷いて、何の抵抗もなしに窓へと突進する。

少し大袈裟ではと思えるほどのガラスの割れる音と共に、空中へ
と体が放り出され

(あれ………？こつちからどうするんだ………？)

サルジアが焦る。

地上25メートルの場所に王の謁見の間があるため、かなりの高さがある訳で

(え……これ自殺行為じゃね?! ちょ……カインどうすんだっ!)

恐怖で自らの顔が引き攣るのを感じながら、友人の方を見る。

「おーい! 糞じじ……国王!! 報酬の件、よろしく頼むなー!」

「このタイミングでそっちの心配かよっ! おい!」

恐怖で出なかった声が、彼のあまりにも空気を読まない発言に反応し、勢いよく発せられる。

『流石、カイン様。この状況下に置かれても、他のことの心配をなさるなんてっ……!』

ガラスに突撃した時、自分からサルジアの腕から出たノアールが感動したように器用に頬を押さえた。 猫なのに。

「だよな、流石俺だろ? ……ってことでノアール空間移動、よろしく頼むわ」

からからと笑ったカインが急に真面目な顔になる。

『もちろんです』

ノアールがそう言うと同時に落下速度が急激に落ち、空中に青白い光を放った魔方陣が浮き上がる。

『とりあえずカイン様の故郷に転送しますわ』

「ああ……。こっぴどく叱られるだろうなあ」

一瞬カインが遠い目をしたのをサルジアは見逃さなかった。

『では、行きます』

目の前の景色が、一瞬で真っ黒に塗りつぶされた。

侵入者と国王（後書き）

黒猫のノアールはメスでs（）

いや、正確には……（この先ある意味ネタバレなので書けませんw）

故郷への帰還 (前書き)

ついにカインの故郷へ！
ふるさと

彼の故郷ってどういう所なんでしょうか(笑)

故郷への帰還

目の前には、たくさんの緑が広がっていた。
今いる場所は、どうやら郊外らしい。少し先にいくつかの民家が見える。

『着きました。カイン様の故郷、ジェラル城に住む領主が治めています、小国ルージュアです』

スラスラと流暢な人間語で話すノアールに感心しながら、サルジアはふと自らの故郷を思い出していた。かなりの田舎で、流行おくれの物ばかりだったが、人がとても温かかった。

決して裕福な生活ではなかったが、妹と弟と母と幸せに暮らしていた時が懐かしい。

サルジアが思い出に浸っていると、隣から盛大な溜め息が聞こえた。

「はぁー……。ミーシャ、怒ってんだろぅな……。あの鬼副官……。」

ボソリと言った彼の口から、女性の名が出てきたのは気のせいだろうか。

彼は、自らの赤みがかった茶髪ををぐしゃぐしゃにしてその場にしやがむ。

「あー……。俺やっぱ行きたくねえわ。……。サルジア、お前だけ行け」
本当に行きたくないらしく、声音に全く元気がない。

『ダメですよ、カイン様。きっと、ミーシャやデリックは貴方様の帰還を心からお待ちになっております』

「デリックはいいとしてだな。ミーシャの場合、あの金切り声で俺を叱りたくて俺の帰還を待っている気がするんだが……」

うわ、思い出しちゃった！などと言いながら頭を抱え込む。

「……カイン、とりあえず行こう……な？」

状況が理解できないが、ノアールに「貴方からもカイン様に言うて下さい」と言われたのでとりあえず当たり障りのない事を言うてみる。

「……………」

(ここで動かないって気がメチャクチャ伝わってくるんだが……)

どうしてカインは、自分の故郷に帰りたくないんだ…？

『カイン様。もし私があと10数えるまでにその場を立たないようでしたら、強制的にミーシャの目の前まで空間移動を行いますか、どうしますか？……………』 1 2 『

「ちょ、ちょっと待ったっ！！分かった！俺が悪かったから、それだけは止めてくれっ！！」

すごい勢いで立ち上がったカインは目の前にいたサルジアに向かって「おっしや、じゃー行くかつ！」と引き攀った笑みで促がす。

『それでこそ、我が主。では、向かいますよ』

そうして、2人と1匹は民家のある方向へと歩いて行った。

く く く く く く く く く く

しばらく歩くと、たくさん民家が並ぶ道に出た。

路上では子供が遊んでおり、とても楽しそうだ。

彼等がやっているのは、紐を、不思議な形をしている木材の突起を中心にしてに巻いて、紐の端を持ちつつ、木を投げて器用に回している。

なんとという遊びだろうか？

(俺の国にはなかった遊びだなあ……)

じつとそれを見てみると、少年達がやりたいと思ったと勘違いしたのか「兄ちゃんもやるか？」と言って、紐と不思議な形になっている木材をぐい、と押し付けてきた。

「え……？えと……」

こうした場合、どうしたら……。

「悪いんだけどな、この兄ちゃん、回し木の回し方、知らないんだ」

カインが助け舟を出した。

「あれー？カインじゃんっ」

サルジアに回し木と呼ばれる物を押し付けてきた黒髪の少年が彼の顔を認めると目を輝かせる。

「帰ってきたのか！！！！」

周りにいた少年達も、彼を見てとても嬉しそうな顔をした。

「おうっ！帰ってきたぜっ！！皆、元気だったかー？！」

そう言っつてニツと笑った彼は周りにいた少年達と同じ表情をしていた。

「「「元気だったぜー！！！！」」」

良い子達の元気な声が、民家に響く。

すると、その声を聞いた大人たちが集まって来た。

「あら、カイン様じゃないかい」

初老の女性が、からからと笑いながら彼の肩を軽く叩いた。

「帰ってくるなら言ってくれれば、皆で祝ったのに」

彼女がそう言っつと、その場に集まってきた大人までも「カインさんが帰ってきたぞー！」「今日は飲むぜっ！！！」「パーティーだっ

！！！！パーティーを開こう！！！」と口々に騒ぐ。

「なんなんだ……………」

あまりにも陽気な人々の雰囲気には呆然としてみると、カインが振り返る。

「じゃあ、サルジア……………俺の家に案内する」

瞬時に暗い顔になる。

まるで死刑宣告された囚人のような……………。

「お、おう……………」

『それにしても、流石カイン様。自らがお治めする国の方々とのふれあいも欠かさないとは……………。やはり、一生付いて行きますわ……………！……………！』

「へえ、そんなすごいのか、カインは……………。……………ん？今、何て言った？」

空耳だろうか。

今この黒猫はカインがこの国を治める……………などというようなことを言ったような。

『……………カイン様がこの国をお治めする方だと言う事でしょうか……………？……………まさか貴様……………知らなかったのか……………？』

ノアールの声音が鋭さを増す。

しかし、サルジアにはそんな事は本当にどうでもいいことだった。

一気に自分が真っ青になっていくのを感じながら、

「う……………そ、だろ……………？」

『嘘ではありません。何故私が嘘を付かなければいけないのです』
冷静な黒猫の声で止めを刺された。

「っ……金に目がなくて、傍若無人で、人の事なんて何も考えない、良心というものがあるかどうか分からないウイंकが下手なコインが
ツが
?！」

叫んだ。

「いや、ウイंकが下手ってのは関係ないだろ。……って俺、ウイंकが下手なのかつ?！」

カインがサルジアに突っ込みつつ勝手に落ち込む。

『……カイン様、落ち込むところはそこではないかと思うのですが
ノアールが控えめに言った。』

「ヤバイ、俺、恥ずかしくて立ち直れない」
カインが頭を抱える。

サルジアはサルジアで、真っ青になりつつなにかブツブツと呟いては不気味な笑い声で笑い、またブツブツと呟き……を繰り返している。

『……どうすればよいのでしょうか……』
ただ一人……いや、ただ一匹、冷静な黒猫はこの状況を立て直す一番効率的な対処法を探し始めた。

〈 〉
〈 〉
〈 〉
〈 〉
〈 〉
〈 〉
〈 〉
〈 〉
〈 〉
〈 〉

「ああああああ……着いてしまった……」

眼前に聳え立つ、それなりに立派な城を見上げながら、カインが
呟く。

「……サルジア、また壊れるかもな……」

黒猫に顔面を容赦なく切り裂かれたサルジアは、泡を吹いて気絶
していた。

もう一度、友人を担ぎ直すとノアールに視線を向ける。

「じゃあ、行くぞ……」

『はい、カイン様なら、どこまでも着いていきます』

「……………」

よくそんな恥ずかしいセリフをいとも簡単に言えるな、と思いつ
つ、門へと足を向ける。

「誰だっ」

門で番をしていた男が、カインに向かって叫ぶ。

そりゃあ不審にも思っはずだ。

泡を吹いている青年を担いだ男が、黒猫を連れてゆっくりと近づ
いてくるのだから。

実際、カインの足取りが遅かったのは、ただ単に城に入りたくな
いという気持ちからだ。

「あー……えつと……俺は、カインってんだ」

「カイン……？」

それを聞いた門番が瞬時に態度を変える。

「カイン様ですかっ？！ご帰還されたのですね！！ご無事で何よりです！皆待っています。どうぞ、お入りください！！……！」

尊敬の眼差しを向けつつ、カインに敬礼する。

「ご苦労さんだな。交代はいつだ？」

「深夜2時ごろであります！！」

「頑張れよ」

自らの部下を労いながら、目前に立つ我が家を見る。

「ただいま」

誰にともなくそう呟いた彼の声を聞いたものは、いなかった。

故郷への帰還（後書き）

自分の中（妄想）ではカインの故郷は緑豊かで、市場がほぼ毎朝のようにやっている活気ある国です。小国というところいろいろ大きなさになりますが、とりあえず、前の話に出てきたミラリスやグレイシーよりは断然小さいです。どちらかと言えば、サルジアの故郷と同じくらいの国だと自分では思っています。

ついでに、この世界には〴〵市や〴〵村などといった区切り方はないので《国》と呼ばれる物は、数え切れないほどあります。

例えば、現実で言う小さな村でも、この世界では領主がいれば《国》として成り立ちます。

……………なんか難しいですね……………説明が下手で申し訳ない……………。

『紐を、不思議な形をしている木材の突起を中心にしてに巻いて、紐の端を持ちつつ、木を投げて器用に回す』回し木と呼ばれる遊びは駒のことですb

仲間との再会 (前書き)

前回までのあらすじ

ついに我が家(ジエラル城)に到着した(というよりもしてしまっ
た)カイン。何故彼が自らの城に帰りたくなかったか、今、明かさ
れる (?)

自分で書きながら爆笑してしまいました()

最近PCが出来る時間がなくて前回からかなり時間が経ってしま
い
スミマセン ; ; ;

仲間との再会

城の敷地内は、出て行ったときと変わらずすっかりと整備されていた。

「なんか懐かしいなあ……………」

カインが呟くとノワールも同意するように喉を鳴らした。

「皆、元気かなあ…………いや、元気だよ………………。絶対…………、特にミーシャ……………」

彼女の勝気なあ顔を想像するだけで頭が痛くなる。

「黙っていりゃー美人なんだ…………黙っていりゃー……………」

『カイン様、女性に対してそのような事を口にはいけませんわ。例え思っていたとしても…………。もしや、私はカイン様に堅物女わたくしなどと思われてつ…………!!』

「あー、大丈夫。そんな事思っ
てねえって。頼りになる秘書だ」

カインはそういうと隣を並んで歩く黒猫に笑いかける。

『そんな…………カイン様にそのようなお言葉をいただけ
て光栄に御座いますわ』

「そういえばノアール…………じゃなくて、リリアン。お前、いつまで猫のまま
でいる気だよ?」

カインがさつきからずつと気になっていたことを彼女に問いかける。

『カイン様が許可してくださるのなら、今すぐにも人間に戻りたいですね。手を地面につけるなんて不潔ですし……………』

そう言いながら黒猫は自らの前足を見る。

「なんだ。別に俺はいいぞ。戻ってくれて構わない」

彼女は言われた事を必ず守る絶対的存在だ。

だから忘れていた。

自分が下した命令を。

『分かりましたわ』

黒猫がそういった瞬間、瞬時に周りを覆うように白い煙が舞い上がる。

毎回どついう仕掛けか気になるところだが『変身魔法はカイン様に必要ありませんわ』と、教えてくれと頼んでも断られてしまう。

しばらくすると煙幕は消え、さっきまでいた黒猫の変わりに外見が9歳くらいの少女が現われた。

紫の瞳に腰までとどく艶やかな黒髪。彼女の体型にそぐわない大きすぎるトンガリ帽子に、フリルが大量についている真っ黒な衣装。全身黒という格好はある意味異常だが、それが彼女の正装であり、当たり前だ。

「やはり人間という生物は素晴らしいですね。この姿が一番ですも

の

彼女はそう言いながら、カインの前でクルリと一周して見せた。スカートがふわりと緩やかに浮かぶ。

「そりゃー良かった。まあ俺もそっちの方が目の保養……あ、いや、なんでもねえよ」

一瞬彼女の目が鋭くなった気がして、口をつぐむ。

丁度、その時だった。

「あれ？何だコレ」

カインに担がれていた友人が目を覚ましたのは。

「ってカイン、なんで俺を担いでんだ？……なんか顔面がすげえひりひりする……」

サルジアはそう言いながらカインにとりあえず下ろしてもらおう。

「あら、起きたのですか」

そういったのはもちろんリリアンだ。

「……………？君、どこの子かなー？なんか人違いしてないかい
ー？？」

まさか目の前にいる美少女が先程まで共にいた黒猫などとは思えない。もしないサルジアは迷子か何かと勘違いし、とりあえず彼女と視線を合わせるようにしゃがむ。

その様子を見たカインが思わず嘔き出す。

「カイン様っ、お帰りなさいませっ!!!」

彼女はそういって、満面の笑みをカイン向けの。

「……ミーシャ、元気だったか……」

彼女がミーシャさんらしい。

「え……？ 鬼副官じゃなかったの？……メツチャ美人じゃん?!」

さつき目が覚めたときにいた全身黒ずくめの少女もかなりの美人だったが、こちらはまた違う種類の美人だった。

サルジアの言葉を聞くとカインがげんなりした顔になる。

「サルジア……外見に惑わされるな……。コイツは鬼だ。人を騙す悪魔だつ!!!」

カインはそういってミーシャにビシッと人差し指を突きつける。

え？悪魔と鬼って同じジャンルなのか？という質問をサルジアは飲み込む事にする。

「な、なんと人聞きの悪いっ!!!」

ミーシャが金切り声を上げる。

「ほら、始まった」

カインがもう全てを諦めかけた時だった。

「カイン様あつ!!!」

「?!」

いきなり、高価そうなドレスを着た少女が飛びついてきた。年は16〜17だろうか。

「……………えっと、誰かな？」

カインが自分の胸に顔をうずめている少女に話しかける。

「カイン様に抱きつくとはっ！なんと無礼なっ！」

それまで黙っていたリリアンが憤慨したが、カインが手で制す。

「ああ……………申し訳ありません、実際お会いするのは初めてですわね」
少女はそう言って、カインから離れる。

「はじめまして、わたくし私メルヴィナ・ニートル・サルディと申します。
この度は父の友人であるカイン様にお問い合わせがありまして、私がこ
まで赴きました」

ペコリ、と頭を下げた少女は、カールのかかった長い金髪を払い
ながら顔を上げた。

「うわあ……………」

サルジアが思わず声を上げる。

透き通った青い瞳に雪のように白い肌、整った容姿は、彼が今ま
でに見た女性の中で一番美しいかもしれない。

「お前、スゲエ美人だな。俺が今まで見た女の中で一番かも」

カインがサルジアが思っていたことと同じような事を彼女に言う。

「サルディっていうとあの国王の娘だろ?……………どうしたらあんな熊

みたいな奴からお前見たいな天女が生まれてくんた……………」

カインはそう言って、メルヴィナ、と名乗った少女の細い手をとった。

「お嬢様、ここではなんですので、中に入りませんか？お茶とお菓子をご用意します」

ふざけ半分でそう言った彼は、彼女に笑いかける。

「ふふ、面白いですね。…………そうさせていただけると大変嬉しいですわ」

そう言った彼女はどこか嬉しそうだった。

）　　）　　）　　）　　）　　）　　）　　）　　）
）　　）　　）　　）　　）　　）　　）　　）　　）

客間に通した少女はどこか落ち着かない様子で椅子に座っていた。

「……………なんであの子、あんなソワソワしてんだ？トイレか？」

カインが諜報先から先程帰還してきた部下のアレフィーに向かつて問いかける。

「さあ…私には理解できませんが緊張しているのでは？」
表情筋を全く動かさずに、口だけを動かす。

女顔の上美形だと評判の彼だが、普段から無愛想な為、好んで近づく者は少ない。

「へえ……何に緊張してんだか……つてああ、俺にか！」

アルフィーが無言で肯定した。

「……とりあえず、中に入って彼女と話しをしたほうがよろしいのでは？」

客間に視線を向ける部下は控えめにそう言った。

「そうだな、じゃあ行ってくるわ」

客間の扉に手をかける。

「あ、そうだ。アルフィー、スノーランの報告書は俺の机の上に出しといてくれ。それが終わったらサロンに行ってくれないか？俺の友人が怪我したからミーシャに手当てしてもらってんだが……アイツ、絶対出来ないからな……」

不器用かつ人を殺す事を異常に拒む彼女が何故副官かは、カイン以外のものは皆知らない。

「御意」

彼はそう言いながら一瞬で姿を消す。

「さて……あの年の子は扱いが難しいんだが……頑張ろう……」

カインはそう呟くと、客間の扉を開いた。

〵
〵
〵
〵
〵
〵
〵
〵
〵
〵
〵
〵
〵
〵

カインというお方はどういう人だろう。

メルヴィナは慣れない馬を走らせながら、側近がいないことを心細く思いながらも、これから会うはずの男性ひとに思いを馳せた。

『そうだな……アイツを一言で言うなら千年……いや万年に一人の逸材……だな』

今まで滅多に人を褒めた事がない父にそこまで言わせる男性とはどんな人なのか、その好奇心でいっぱいだった。

城に着いたとき『カイン様は只今諜報の仕事でミラリスの傭兵として潜入しております。半年で帰ってくると言う事だったので、多分明後日か明々後日に帰ってくるかと……』と言われた時は自分の超の付く強運に感謝した。

しばらく城に泊めてもらえる事になり、慣れない部屋で過ごしていたが、“カイン”に会えるならと我慢できた。しかし流石に3日目の昼になった時は、いつ帰ってくれるのかと心配になったものだ。

さつき“カイン”が帰ってきたと報告が入ったときは今までにない程舞い上がり、顔を見たときは感極まっていきなり抱きついてしまったが今になって何故あんなはしたない事をしてしまったのかと後悔する。

思い出して顔の火照りを何とかしようと頬を押さえていると、客間の扉が開いた。

入ってきたのは寝癖かどうかもわからないぼさぼさの赤茶の髪をした青年だった。

しかし端正な顔立ちで、少しでも着飾ればとても映えそうだ。

(勿体無いですわ……………城にもこんなに素敵の方、いませんでしたのに……………)

上目遣いで相手を見ながら内心考える。

「……………えーっと……………メルヴィナ様だったよな?……………俺あカインってんだが……………」

その言葉ではっ、と我に返る。

「あ、そのっ!申し訳ありませんっ!…!…!つい見とれてしまいましたわっ!…!…!じゃなくて先程は抱きついてしまい申し訳ありませんでしたっ!カイン様を見て、衝動的に抱きつきたく……………」

言いながらとんでもない事を口にしてしまったということに気付く。

「あ、いえ、スミマセンっ!その、今のは言葉のあやと言いますか……………」

必死で弁解する言葉を探すも、上手く言葉が出てこない。

「ははははははははっ!…!…!そんな堅くなんなくてもいいって!…」

いきなり笑われた。

普段なら機嫌が悪くなるのだが、彼に笑われて悪い気はしなかった。

「アンタ……………じゃなかった…メルヴィナ様、面白いなあ!俺が今まで会った女の中で一番美人だけど、一番面白い!…」

そういつて目の前にある椅子に腰を下ろす。

「まあ……美人だなんて……。今まで誰にももそんな事言われませんでしたわ」

自らが寝泊りしていた城を思い出す。

「へえ……じゃあそいつ等の目は節穴って訳だ。……で、メルヴィナ様、今回はどのようなご用件でこんな汚い城に来たんだ？サルデイはこんな田舎の国に姫さんを寄越すって言う風習があるのか？」
「冗談めかしたことを言いながら、本題に入る。」

昔、サルデイの国王、アレックス・ニートル・サルデイに娘自慢を延々と聞かされたことがある。

目に入れても痛くないと言った彼は彼女を城の最深部に住ませ、できるだけ人目に付かないようにしているらしい。

そして、実際、彼女と会ってみてどれくらいアレックスが娘を大事にしていたかが目に見えて分かった。

城の最深部にいた彼女は文字通り『箱入り娘』だった。そんな彼女が何故一人でこんな所に……？

カインのその言葉を聞いた瞬間、メルヴィナの美しい顔に影が差した。

「……………あの、カイン様、父上から貴方様に手紙を預かってきました。どうぞ、お読みください」

そういつて大事そうに抱えていた薄い封筒を差し出した。

「……………？ああ……………ありがとうよ」

話を逸らされたことに少々疑問を感じながらとりあえず差し出された封筒を受け取る。

「今見て良いのか？」

「はい。……というよりも今見てほしいのですが……」

そう言った彼女はとても悲しそうだ。

まさか、という思いが頭を過ぎる。

急いで封筒を破り、出てきた羊皮紙に書かれた最初の文字を読んだ彼は自らの予感が確信へ変わったのを感じた。

“親愛なる友人 カイン あの約束を君に守ってもらった時
が来てしまったようだ”

冒頭には急いだように綴った筆跡でそう書かれていた。

仲間との再会（後書き）

ノアールはリリアンという少女（？）の仮名だったようです（）
ついでに彼女の着ている服ははつきり言ってしまえばゴスロリです*

王族⇨名前が長いというイメージを持っている自分にとって、王族
の名前を決めるのが一番大変だったり……………

とりあえず自分的にメルヴィナ（名）・ニトール（姓）・サルディ
（国名）……………にしていますww（）
それが一番簡たnげほんげほん

カインの本名（？）はいつか出しますwwww

次回はいきなり手紙の内容から始まるかもしれないのでちょっと読
みにくいかもですね…………… ; ; ;

姫の決意（前書き）

昨日は更新できませんでした（）

もし待っていてくれた方いましたらすみません……
いないとは思いますが（）蹴

毎回サブタイトルに悩みます。

いつも、行き当たりバッタリ（？）で小説本文は書いているので何も考えないで打ってるので、タイトルもすごい悩みます。

本文の内容がまだ全く決まっていけないのに……とw

姫の決意

メルヴィナから渡された手紙の筆跡は間違えなく彼女の父、アレックス・ニトール・サルデイのものだった。

“親愛なる友人 カイン

あの約束を君に守ってもらった時が来てしまったようだ。

敵は大国スノローラン。

いくら私の国でもあの国の兵の数では勝機など無いも同然。

それに私は老いてしまった。

そろそろ潮時だろう。

娘をよろしく頼む。

最期に。

君の活躍は地獄から見ていることにするよ。

アレックス・

ニトール・サルデイ

追伸

娘に、例の剣を持たせた。君が昔欲しがっていたあの曰くつきの剣だ。
私には扱えなかったが君には

扱えるかもしれないな。

あと、娘を泣かせたりしたら地獄から這い出て貴様を呪うから覚悟

しろ”

「……………」

最後の文が気になったが、とりあえず見なかったことにしよう。そう思いながら、ちらりと向かいの椅子に座っている少女を見た。

もつきつとこの子は覚悟しているのだろう。

自らが他の国に売られるかもしれない事を。

「……まあそんな事したら俺は呪い殺されるな……………」
ぼそり、呟く。

なにより、こんな手紙貰わずとも、別にこの少女を売ろうなどという考えは最初から無かった。

「で？アンタ……………じゃなくてメルヴィナ様はどうしたいんだ？」
少し意地悪な質問を試してみる。

「え？……………どうって……………？」

彼女の表情が一瞬固くなるのをカインは見逃さなかった。

「アンタはどうしたい？アンタの意思は？」
もう“アンタ”と呼んでしまう度に訂正するのが面倒になり、そのまま続ける。

「……………売られる覚悟はしていますわ」
小さな声で、しかしはつきりと彼女はそう言った。

声が微かに震えていた。

「だってここには、きっと私みたいな余所者がいられる場所なんてありませんもの」

声が湿っている気がした。

ヤバイ、泣かせる。

「……わりい！ちよーっと虐めちまった！許せっ！」

カインがそう言った途端、メルヴィナがはつとした表情になる。
まさか、という顔だ。

「アンタの寢床も、食事とかいろいろ、もう手配してあるから安心しろ。今日からアンタは、俺の婚約者こよやくしゃって事になるけどいいか？」
もうとっくに決まった決定事項だが、とりあえず本人に確認してみる。

それを聞いた途端、彼女の表情が見違えるほど明るくなった。

「私、ここに居ていいのですか？！カイン様の婚約者ですか？全然いいですわっ！むしろ本望ですっ！」

勢いよくそう言われた。

「……………いや、そこまではっきり言われると逆に確認した俺が恥ずかしいんだが……。恋愛沙汰なんて興味なかったし……。一生独

身だと思つてたからなー」

最後は独り言になつてしまった。

「まあ、そんな感じでよろしく頼むわ。メルヴィナ様？」

カインがいつもの調子で少年のような表情をして笑う。

「ええ、よろしくお願いします」

こうしてカインは友人アレックスとの約束を果たした。

〈 〉
〈 〉
〈 〉
〈 〉
〈 〉
〈 〉
〈 〉
〈 〉
〈 〉
〈 〉
〈 〉
〈 〉
〈 〉
〈 〉
〈 〉

メルヴィナを連れてサロンに向かう間、カインは昔を思い出し出していた。

多分18くらいの時だ。

彼女の父親に会つたのは。

丁度、飢え死にしそうな時に、戦場から戻つてきたアレックスに森で倒れていたところを拾われた。

「世話好きなお節介爺おっしや」と皮肉を込めて言うつと毎回のように「俺はただの偽善者だからな」と言う答えが苦笑と共に返つてきたの今でも覚えてる。

少しの間、昔の思い出に浸ると、隣を歩く少女を見る。

「緊張するか？」

何気なく聞くと女神のようなその顔で満面の笑みと共に

「カイン様が居るのなら全く恐くありませんわ」

という力強い答えが返ってきた。

）　　）　　）　　）　　）　　）　　）　　）　　）　　）　　）

サロンの戸を開くと、壮絶な戦い^{バトル}が繰り広げられていた。

「……………」

カインとメルヴィナは、思わずそこで固まってしまふ。

「……………」

サロンにいた者も同じだった様だ。

まさか、このタイミングでこの城主が来るとは思わなかったのだらう。

ただ一人、平然といつもの仏頂面で一瞬カインに頭を下げたのはアルフィーだけだった。

カインは、割れた花瓶や、引き裂かれたカーテンを一瞥し、一同をギロリと睨む。

「お前らあつ！！！！掃除担当の奴等がどれだけ苦労してっと思ってんだあ！！！！今すぐここを片付けろっ！！！！3分だっ！！！！3分待つから！！！！！！！！今すぐ何とかしろおおおお！！！！！！！！」

「！！！！」

彼の怒声は、城中に響いたという。

）
）
）
）
）
）
）
）
）
）
）
）

「で？何があつたんだ」

少々不機嫌になつたカインが一同を見渡して低い声で脅す。

「……………あのお……………僕、丁度通りすがつて見てしまったのですが……………」
新米の警備兵がそういつて手を上げた。

いかにも気弱そうなビクビクしている感じのその青年は、全てを白状した。

「上の階から物音が五月蠅い、と先輩から聞いて、僕がこの部屋に駆けつけたときでした」

急いでこのサロンの扉を開いて中に入つてみれば、ミーシャ様がカイン様の友人というサルジア様の怪我を手当てしようとして、でもなんかサルジア様は凄く嫌がつてたんですね。

……………実際僕の目から見ても、ミーシャ様は怪我の手当てをすることは不向きかと思いますが……………。

そこで一回警備兵の言葉が途切れる。

ミーシャが彼を睨みつけたからだ。

……………それで、あまりにも抵抗するサルジア様をミーシャ様が押さえつけようとしたら、サルジア様が何かが切れたみたいに急に怖い顔になって何か呟き始めたと思ったら、よくよく聞いてみるとそれがルーンの詠唱だった事に気付きました…。

急いで止めようとしたんですが、僕が止めるよりも先にサルジア様が低級悪魔を召喚してしまっ……。

そいつ等がまた厄介でして

「……………ありがとう、もういい……………。えーっと君、名前は？」

カインが頭を抱えつつ、警備兵に視線のみを向ける。

「は！二等兵のキアルと申しますっ！！」

びし、と敬礼し、はきはきとした声で名乗る。

「あーそうか、キアル君。報告ご苦労。…………アルフィーを送るのが遅かった俺のミスでもあるな…………」

カインが一人ぶつぶつと反省していると、サルジアがあれ？という声を上げた。

「カイン、その子さっきの…………」

彼が言う“その子”はメルヴィナを指す。

「ああそつだ、皆に言う事がある」

それまで立ち直る気配すらしなかったカインが、メルヴィナの肩に手を置き、少年のような笑顔でこう言った。

「この子、今日から俺の婚約者だから、そのつもりでよろしく」

次の瞬間、サロンに怒号と悲鳴が上がったのは、言うまでもない。

〜
〜
〜

「な、ななな、何でそんな綺麗な美女と、お前がここに、こん、
婚約するんだ」

笑い飛ばそうとしているようだが顔が完全に引き攣っている上に、
噛みまくっているサルジアが、この場に居る全員が疑問に思っている
ことを代表して口にした。

「あー……俺18時コイツの親父さんと約束しちゃったの、忘れて
てさあ。いや、俺も昨日まで一生独身だと思ってたしなあ」

ちょっと待て、お前今何歳だ！という質問は伏せておく事にす。
てつきり18前後だと思っていたのだが……。

「とういかなんでそんな重大な事忘れんだよ?!」

「仕方ねえだろ？俺だってあのお節介爺が本気だとは思わなかった
んだ」

「……………」

しばらくの間、サロンに沈黙が続いた。

「嘘……………」

ボソリとそういつてその場に気絶したのは、ミーシャだった。

その瞬間、糸が切れたようにサロンが騒がしくなる。

「隊長が婚約?! 式の手配だ!」

「誰か! 誰か酒を用意しろっ! 高級な赤ワインな!」

「カイン様、婚約しちゃうのぉ?!」

「ちよつとタイプでしたのに……」

「隊長ならいつか彼女作ると思ってた!」

「流石ー! よっ、男前隊長っ! ! !」

など様々な言葉が行きかう。

その光景をそれまで黙って見ていたミーシャがくすりと笑って一言

「ここは本当に素敵なところですよ」

こうしてカインが城へ帰還してからの一日目が幕を閉じた。

姫の決意（後書き）

メルヴィナは一番美人（というより愛らしい）キャラという設定ですb（）

そういえばもう一人の副官、デリックがまだ出ていないことに、皆さんお気づきでしょうか（）

……気付いている方、いましたらすごいです……！！

この小説に対するアドバイス、感想など随時募集中ですので、お気軽によりしくお願いします（）、*（）

登場人物紹介（前書き）

ここらでそろそろ紹介しようかと…（笑）

しばらくしたら割り込みで一番上のほうに配置しようと思いますが、
とりあえず今だけは7話目に配置しておきます*

登場人物紹介

カイン(?)…外見は18歳前後の赤茶髪の青年。傍若無人だが、意外と人に好かれるタイプ。実は小国ルージョアを治めている国王…。のはずだが本人にその気は全くないらしい。剣術に長けていて普段から帯剣をしている。過去にいろいろあつたらしいがその内容をここで書くとなタバレになる他、作者がその話を書くのを怠けそうなので、とりあえずそこらへんは今のところスルーで。ウインクがとてつもなく下手。

「……もうウインクの件は持ち出さないでくれ……。羞恥心で俺死んじゃうからっ！な?!」byカイン

メルヴィナ(17)…本名『メルヴィナ・ニトール・サルディ』。サルディ国の姫、現在カインの婚約者。美しすぎる容姿で、その上性格もいいがやはりお嬢様育ちの為少し浮世離れしている。カインには一目惚れだったらしく、出会った当初から抱きついてしまったという可愛らしい一面がある。

「私が可愛わたくしかつたら世の中の女性はもつと可愛らしいですわ……」(真顔) byメルヴィナ

サルジア(21)…カインの友人。傭兵の頃知り合い、その日の内にカインとは打ち解けたらしい。庶民の出だが、学問が好きだったようで意外と頭はいい(らしい)。魔術専門の傭兵として雇われる事が多い。主にカインの突っ込みとしてキャラが成り立って……。(沈黙)。

「ちよつと待て！何その沈黙!?もう俺、突っ込みとしてもキャラ成り立ってない?!」byサルジア

リリアン(?)…黒猫の時の名は『ノアール』。とおに500才は

超えているらしい。外見は9歳くらいで全身黒ずくめ（人はゴスロリと言う）の格好を欠かさずしている。（ついでにスカート丈はその日によって変わる）。背丈に沿わないトンガリ帽子が特徴的。可愛いものが大好きらしく、ゴスロリには異常なほど大量のレースがついている。黒魔女代167代目当主。

「年齢？……レディに聞いてどうなるか、貴方分かってるんでしょうね？ふふふっ」byリリアン

ミーシャ（20）…メルヴィナには劣るが、結構な美人。人を切ることも、傷を手当することも出来ない彼女が何故副官かは不明。よく金切り声を上げてはカインに文句を言われる。本人に自覚なし。

「……私がいつ金切り声を上げましたか……？」byミーシャ

アレフィー（？）…女顔で顔立ちも整っているのだが無感情、無愛想、無関心な青年。主に諜報を勤める。カインの命令とならば何でもこなす、カインの右腕といっても過言ではない。

「……」byアルフィー

デリック（22）…まだ登場していない為、しばらくしたら更新します。

今のところこんな感じで。

しばらくしたらちゃんと更新しますb

登場人物紹介（後書き）

……重要登場人物、意外に多い……

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9626y/>

永久の覇者 カイン

2011年12月17日02時49分発行